とひ法然上人にすかされ參らせて、念佛して地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず候」

と仰せられた。通常の人には到底出來ない所であつた。吾人が佛の道に進むのには、此の馬鹿〳〵しい事をせねばならぬのである。然るに此の容易い事が出來ない、大經には易往而無人と仰せられてある。所謂やさしい眞宗に多くの人が入り惡いので、之が易行即ち難行たる所以である。

▲心は眞の親に非ず

それに就て今日一般の教育は方向が間違つて居るかと思はれる。只偉い者を作るとか、怜悧な者を作るとかに齷齪して居る。ある日本橋の信者が私の學校に女生徒を入學させた。其時信者が云ふのに、

「私共夫婦は此の子供を學校にお願ひするのは、偉い者にするとか、賢くして欲しいと云ふのて𤔲ない。唯私共の目的は私共夫婦は彼の子に、ほんとの親て無いことを知らして貰いたい爲に入學させたのてす。どうか學校に居る間は貴方の力て此の事を、よく聞かして頂きたい」

私は誠に面白いことと思ふた。一般の人は自分が眞の生みの親でなくても、生みの親らしくされたいと思ふ。又親の云ふことを聞かぬから、よく聞く樣にとか、親を大切にするやうにと注文するものはあるが、私は親て無いといふことを知らしてくれる樣にと言ふものは實に稀てある。眞の親てないと云ふのは、肉體の親

てはあるが、いつどんな變化があるかも知れぬからあまりたより過ぎて居ると、萬一のことのあつた時どんなに失望するであらう。今の内に眞の親樣を見つけて、お慈悲を喜ぶありがたい身の上にして貰いたいと云ふので、味へば味はふ程面白いのである。

▲賢妻たらんより愚母たれ

此の話を私が小田原の敬愛婦人會で話した所が、幹事の今泉氏が後で、

「之は試に面白い話である。私も家内に、お前は賢母にならんで、せめて愚母になつて呉れと申して居る。と云ふのは、今時の女子は賢すぎて困る。それで小供を育てるにも、自分が親顏をして、偉さうに賢こさうにして育て居る。それでは却ていけない、寧ろ愚母たることを自覺して、努めて貰いたいものである。」

此の話も亦深く味はふべきものである。われ〳〵は兎角親は親として賢くなりたがり、夫は夫として賢くなりたがる。妻は妻として賢くなりたがる。主人は主人として賢くなりたがる。召使は召使として賢くなりたがる。斯く皆んなが賢くなりたがり、餘りに賢くして爭ひが多く、斯くて一家の平和は亂れて來るのである。自から愚を自覺するに於て平和となる。眞理は平凡な所に宿つて居る。佛の慈光に浴し佛の加護を蒙む る時に於て、初めて平凡の中に尊い生活を見出すことが出來る。易行即難行の意も實に此の點にあるのである。

心の平和

▲無駄な取越苦勞

菜根譚と云ふ書は中々味はひのある教訓を多く含んだ修養書である。その中の一節に

風來疎竹。風過而竹不留聲。雁度寒潭。雁去而潭不留影。
故君子事來心始現。事去心隨空。

と云ふ句がある。その意味は風が竹藪にそよ〳〵と吹いて聲を立てるが、一旦風が去ると音はハッタと止む。雁が寒い潭の上を飛ぶとその影が映つるが、雁が飛び去ると水にうつた影も消えて了う。君子の態度も當にかくあるべきであつて、何か事件が起れば其方に心を向べきであるが、事件に結末がつけば再び心はカラリとして虚心怛懐であるべしとの謂である。所が我々凡人の常として、事も起らないのにソワ〳〵して落つきがとれず、無暗にクヨ〳〵と取越苦勞をするものである。のみならず事件が去つて了つた後でも、あゝては無かつた、こうては無かつたと女々しい繰事に胸を痛め勝ちである。有名な漢學者佐藤一齋も同じ意味のことを、心は現在を要す、こと未だ來らざれば邀ふべからず、こと既に往けば追ふべからず」と云ふ言葉で述べてゐる。吾々の心は現在に働かねばならぬ。強いてクヨ〳〵取越苦勞をして見たり、又亡き子の年を數へるような無駄事に心を腐らすべきものでない と誡めたもので、前の菜根譚と同巧異曲の語である。共に吾々の

精神修養に益することの多い訓であると思ふ。

▲莫妄想の三語拾萬の元寇を破る

彼の有名な蒙古の忽必烈が飽く無き欲望を充さんため無禮極まる書を我國に寄せた時、この大事を背負つて立つべきは、時の執權北條時宗其人であつた。元の要求に應ずれば固より我國家は滅亡、應ぜざれば四海に威を縱まゝにしつゝある大強國を向へ廻はして戰はねばならぬ。どつちにしても國家危急存亡の秋であつた。豪勇無双の時宗と雖も何で心が亂れずに居られやう。そこで彼は心の苦悶に堪えかね、遂に日頃師事してゐる祖元禪師を訪うて、具きに心の悶を訴へ意見を求めた。祖元禪師は支那から歸化した人であるから、豫てより元の襲來も想像出來たし、又時宗の胸中もよく呑込んでゐた。今時宗の相談を受くるや否や師は。「莫妄想」の三語の下に一喝し去つた。時宗は忽ち胸中風光霽月、おのれの驀進すべき大道を感得し、禪師の下を辭して直ちに元使を斬り、以て決意の存するところを示した。其後再三元使來るも常に前の如く斬に處して以て牢乎動くべくも無かつたから、遂には蒙古の大軍が來襲したけれども時宗の膽は所謂甕の如く、よく力戰苦鬪、さしもの強敵をも美事に挫いた。して見れば國家を泰山の安きに置いたものは莫妄想の三語に外ならない。莫妄想とは力强い語であるけれども、言ひ換ゆれば「若しや」の心を持つなとか「取越苦勞」をするなと言ふと同樣である。寇がやつてくればやつて來た時の覺悟をするまでで、何も寇が來たら何としやうと餘

計の心配をするに及ばぬ。事件の當面に全力を注ぐべきを親しく禪師は時宗に訓へられたのである。

▲俳人一茶の信仰

信濃出て有名な俳人一茶が年末に當つて口吟さんだ句に

何事もあなた任せや歳の暮

と云ふのがある。頗る味はひの多い句と思ふ。年末になつてから、あゝして置けばとか、こうすればとか考へたり、或は正月にはどうだとかこうだとか考へたりしたつて一向始まる譯のものて無い。こゝて「あなた」とは一茶の信仰を指したのて佛を云ふのてある。彼は日頃彌陀一佛に歸命してゐる信仰の人てあつたから、かように任運無作にやさしく心の平和が句に充溢してゐるのてある。歳の暮になつて金があれば有つて暮すし、無ければ無くて暮す。何も今更地駄莫駄したつて致方がない。この優しい一茶の句と彼の祖元禪師の凛々しい「莫妄想」とは表現の方法は違うが、其に脈絡を通ずるところがあつて、大變味はひの深い教訓と思ふ。

▲安直な諦め主義と取越苦勞

斯樣に「莫妄想」とか「あなた任せ」とかは餘計な取越苦勞をしない心の平和狀態てあるが、それは單に末を考へ過去を思はない現在一方、所謂昔から人のよく云ふ「江戸つ兒は宵越の金を費はず」と云つた風の、やりつ放し、惡諦らめとは大變意味合が違う。既に見る如く、「莫妄想」の裏には禪の活潑々地なる信仰が躍動してゐるし、「あなた任せ」には金剛不壞の絶對他力の信仰が控えてゐるの

てある。取越苦勞をしないで餘裕あるには、それだけ内に深い根底が無けんければならぬので、たゞ漠然と現在に向うだけなら、そんな所に安心も平和もあつたもので無い。そんな薄ぼんやりの事を今私は言つてゐるのでは無論無い。だから大安慰を得んには寧ろ大煩悶を爲すべしと私は言ふ。同じ取越苦勞をしないのでも、内に自ら磐石の如く信ずるところあつて然るのと、たゞ單に一時の氣安めに過去を忘れ未來を思はぬ風を裝うのとは、全然別であることに注意せなければならぬ。取越苦勞のつまらないのは、安直な諦め主義のつまらないのと五十歩百歩である。

▲盗人怖はや火事恐ろしや

一體愚にも付かぬ事を彼此思案して氣を腐らす心理狀態には、一種の矛盾が含まれてある。例へば此處に非常に盗人を怖がる人があるとする。若しや盗人が這入りはすまいか、這入つたら何としやう。不景氣で世の中が物騒だ。盗難が頻々だと言ふことだから、今晩あたり見舞はれはすまいか。そこで色々苦心の末嚴重に戸締をしたとする。ところが今度は、若しやこんな嚴重なことをして置く間に火事は起るまいか。地震があつたらどうだらう。逃ぐるに逃げられず死んだりしはすまいか。こう考へて今度は掛けた錠をも外して見る。その中又盗人が氣にかゝる。こんな風にとつ追ひつ錠を掛けたり外したりして轉々反側する人がよく世間にはある。これ明かに此人の心理狀態に矛盾が含まれてゐる證據ではあるまいか。この矛盾このディレンマから逃

れ、取越苦勞をしないで眞に當面の事件に洒々落々と全力を傾倒し得る平安の心的狀態に住せんには、どうしても其處に一つ動かない確乎たる宗教的信仰が無くては叶はぬことと思ふ。くよくよしないとか女々しくないとかには、それだけのものが內に有らんければ出來るものでない。

▲危き生命

人生の大事件は死の問題に過ぎたるは莫く、そしてこの死てふ問題に確乎たる解決が着いて無い以上は、とても精神上の大平安に住することは出來ない。然らばその精神的平安は何處から來るかと云ふに、そは宗教的信念を外にして何處からも來るものでは無いと思ふ。然るに私共はこれ程大事の死をとりつめて吾身に考ふることなく、たゞ他人事とのみ淺墓に考へ易い。それに就て私は近頃世間の無常を歷々と痛切に感ずる實例に逢つた。昨年六月九日私が橫濱の高島屋の講話に赴いたとき、橫濱停車場より高島屋に至る道筋に於いて、奇しき死の運命に弄ばれた可憐の少女に就ての物語を人力車屋から聞いた。彼がさる橫町の一軒を示して說き出した物語の筋はこうてある。その日威勢よく走つてゐた一臺の自動車が運轉手の間違から左へ曲るべきを右へ曲つたため、自動車がその家に飛び込み、折しも店前に遊んでゐた六歲になる一人娘を殺して了つたさうである。この事を聞いて私は痛切に人生の無常と不安とを覺えたのであるが、折も折とてその晩私が橫濱から新橋驛について歸路、數寄屋橋にさしかゝると、

多くの電車が停つて大變な騒であつた。聞けば電車が衝突して一臺の中央に居た客に大負傷をさせたとのことである。彼と言ひ此と言ひ、人は何でかくあるべき危き運命を知らうや。轉じて人生を見るに皆斯かる儚なさならざるは無いのであるが、吾々はそれと知らず常に安固であるやうに思ひなして其日を送つてゐる。啻に少女の上でもなく、又電車の一客の上でもなく、私自身が刻々危き道を辿つてゐるのである。だから冷然對岸の火災視せずに、死の問題を徹底的に考へ、而して徹底的に解決して置く必要がある。

▲死を怖れつゝ悶死した高利貸

前にも申した通り、信仰の立場から死の問題に確然不動の解決が着いてゐると、くだらぬことに神經を惱ましたり、取越苦勞をしたりしないで、落付いて悠々と當面の事件を處理して行くことが出來る。この點になると、だうしても宗教的信仰の有無は非常な相違を來して來る。私の知つてゐるお醫者で横濱の青年會を世話してゐる加賀美と言ふ篤信な方がある。氏が信仰の有無は病人を非常に變化させるものであると云ふ實例に次のやうな話をされた。

横濱に高利貸で何十萬圓といふ資産を築き上た人があつたが、二三年前糟糠の妻に別れ、剩へ巨萬の富も讓るべき子が無いから、非常に悲觀に陥つた。そこで最早儲ける必要もないから、これから此大金を思ふ存分費つて餘生を送らうと決心した。併し何十

萬圓を五年や十年に蕩盡するのは容易でないから、是非共長壽する必要がある。それて前記の加賀美氏を訪うて、先づ百歳位の長壽法は無いかと尋ねたから、氏は一通りの衞生法などを說いて聞かせた。爾來その人は能くその敎訓を守つて衞生に注意して居たが、或夏不圖したことから病に冒されて發熱した。所がこれからと云ふものは急に心の平和が破れて囈語を口走り、死にはしないか、死んだらどうしやうなどゝ神經を痛めて少しも落付かない。果ては寢ても起きてもゐられないものと見えて、床を二階に移させたり又階下に移させたり丸で狂氣のやうであつた。加賀美氏は當初から診察してゐられたが、別に大した病氣でないから、其旨を告て先づ心を落付けるように勸めたが、一向甲斐が無い一日一日と死の强迫觀念に襲はれて狂人じみた行爲が多くなるばかりであつた。遂に死ぬべき筈てないものが、自分の心からして一週間程で悶死する運命となつた。これなどは取越苦勞の最もくだらない實例としてよいものであるまいか。彼はたゞ何十萬圓の資產のために生を貪り、死を怖るゝのみで、更に死と云ふものに解決がついてゐないから、ドゞのつまりは自分で自分を殺すようなことゝなつたのである。若し彼にして些少たりとも宗敎的信念があつたならば、あゝは容易く死ぬのでは無かつたものをと、加賀美氏は感慨深く話されたことであつた。

▲死んだ先きの覺悟

死の洗禮は何人とても受けずに濟むものでないから、平素とり

つめて吾身の上に考へ根本的に解決して置く必要がある。そして一旦死の問題に解決がつけば、常に大安心の思に住して人生の事に虚心平氣で應對が出來るのである。それについて『銃後』と云ふ日露戰爭當時のことを書いた書物の中に、感興深い一節の物語がある。某大尉が愈々大命を拜して旅順へ出征することゝなつた。するとその妻君は「貴郎覺悟は宜う御座いますか」と尋ねた。大尉は別に氣もつかずに「軍人は君國のため死は鴻毛よりも輕いのだ」と輕く受流した。更に妻君は「死に未練はありますまいが、死んだ先はいがゝなさいます」と聞いた。大尉は「軍人は死するが本望だから、死ぬだけで死んだ先など考へてたまるか」と少し怒氣味だつた。妻君は「それでよく貴郎死ねますね」と言つて默した。大尉はおまへはお寺などで聽きかじつたから色々言ふのであらうが、私は私の覺悟がある」と言ひ切つた。所が又翌日になると、妻君は同一質問を持ち出すこと前日に異ならない。そして大尉の返答も依然前と同じで、斯樣にすること再三再四、その中遂に大尉は出征して了つた。

話變つて或日本願寺の從軍布敎使某が旅順攻圍軍司令部の前を通行すると、一人の大尉が精々と書き物をしてゐたが、フト布敎使を見ると呼び込んで、次のような物語をした。「實は出征前に妻が斯く〳〵のことを幾度も言ふたが、私は其時一向平氣で爾來全く忘れてゐた。所が愈々旅順に來て、先輩や知人朋友が毎日〳〵戰死して行くのを見ると、急に妻の言が氣懸りになつて、心が亂る

るばかり。仕方がないから貴僧が兵士に向つて法話せらるゝを隅に隠れて聽問した。すると妻の駄目を押した意味合はカラリと解り、始めて佛の尊き慈悲が骨髄に徹透した。今となつては私は死ぬては無く、永遠無窮の生命に生きさせて貰ふことが出來るのである。それにつけても誠に妻に對しては申譯無く今頃は定めし故郷の空に私の精神の浮ッ調子を憐んで心配して居るであらう。私は愈々今晩戰線に立つのであるから、固より明朝迄命があるとは思はないが、もう何時死んでも恨とするところは無い。實はそれにつけても此次第を妻に知らしてやりたいのだが、もう暇がないから、何卒私の死んだ後は此次第を詳しう妻に知らせてやつて貰ひたい。これが貴僧に對する御願である」と云ふような話

て、某も大層喜んで快く承諾した。果せる哉其夜の戰で大尉は美事君國のために討死して了つたそうである。妻君の信仰から溢れた婦德、大尉の信仰による武功、永く一雙の美談として傳ふべきであるまいか。

▲飛行偵察の成功とお守の力

今度の日獨戰爭で最初の戰死者として天逌の武功を樹てた佐久間騎兵少佐は日頃久留米師團に在る時から深く禪に大悟してゐたさうである。戰死者の報知を受けた遺族の人々が遺言狀を公開すると、中から氏が佛前に座禪してゐる一葉の寫眞と、精神の平安を得た經文の寫とが現はれた。この覺悟、この安心があればこそ、始めて勇敢壯烈な最後が遂げられたのであると考へる。

近頃博文館から出版になつた戰爭實記中に、所謂飛行機隊の一將校が青島を偵察した間に物した感想的日記が掲げられてある。私はそれを讀んで大變感じたことがある。飛行將校等は誰れも皆とり〳〵にお守を持つてゐるが、其中でも彈丸雨飛の間を無事に歸つて來た人の持つてゐたお守は同僚の間に非常な信仰を受ける。だからいざ飛行となるとその人の持つてゐるお守を借つて出かくると云ふ始末であつたそうだ。斯樣にしてその人々等の間には、お守のお蔭で機は壞れ着衣は彈痕を受ても身は安全なるを得たのであるてふ信仰が、一回は一回とつのるのみであつたとの事である。固より此日記に表はれた信仰は眞の宗教的信仰より見れば低級のものではあるが、それに拘はらず矢張何等かの信念無くしては命懸の大事を遂げ得るものでないと言ふことを實際に證明したものとして味はへば、頗る興味深く感ずる。

▲眞の心の平和は唯信佛語に在り

既に御聖教には、病に冒されて死するものあり、火に燒けて死するものあり、水に溺れて死するものあり、乃至寢死するものあり」とさへ、手ひどく死の迅速、世の無常をお諭し下さつてある。どうしても私共が眞の心の平和を得て確然不動事々に處せんには、死の問題を參究して置かんければならぬ。死の問題を徹底させんには絶對他力の大道に據る外はない。道理や理窟づめで眞の心の平和を得らるゝものでない。たゞ信仰、即ち仰いで佛の命を奉ずること、唯信佛語あるのみである。偏に彌陀一佛の本願を聽くよ

り外に心の大安心は、何處を求め何處に尋ねても出て來るものてない。何事もあなた任せや年の暮。斯樣な心の大平和を獲得するための信仰には、私達は多少の手間隙惜しまず聞法にいそしまねばならぬことゝ思ふ。

求道の態度

▲南隱禪師の一喝

求道とは道を求め、法を求むるので、求道の態度とは即ち聞法の態度を云ふのである。どういふ心持で宗教を求めたらよいのか、どういふ態度で信仰は求む可きであるかと云ふのである。

禪宗に有名な南隱禪師と云ふ大德が居られた。一人の青年が平生學問をして居るが、今日は一つ南隱禪師に面會して禪の極致を聽いて見やうと寺へ來たのである。禪師は青年を室に導き、先づ茶を出して暫時は一言の挨拶もない。青年が一口呑んだ茶碗へ更に茶を注ぎ、一杯になつた上に、更に注いだので、茶は溢れ出した。青年は之を見て禪師は老眼であると思ひ「禪師もう一杯て溢れかけました」と云つた。すると禪師は忽ち

「邪心滿てり、理も亦入らず」

と大喝せられた。其意味は茶碗の中に茶が一杯あればもはや入らぬ。邪の心、增上慢の人には話しをして聞かしても駄目てあるといふのてある。そこてその青年は深く自分の不心得を詫びて、眞面目になつて、法を聽いたと云ふことてある。

▲老年と青年の求道

之は少し以前の話であるが、十年乃至二十年前には是の如く素見半分の聞法者が多かつた。然るに近頃は都會と云はず、地方と云はず、全體に求道の工合が以前の知く素見半分ではなくなつた。然らば今日の人の求め方は、以て十分であるかと云ふに、それは問題である。つく〳〵眺めて見るのに、此法を求めるのは、新しく來る人の方が比較的眞面目である。以前から寺參りをして、説教の座席を重ねた老人達の方が案外眞面目を缺ひてゐる。何故新來の青年が眞面目であるかと云ふに其人々は病氣とか、或は其他の理由で、是非共宗教を求めて之に依て我胸の中の煩ひを取去つて貰はねばならぬと、云ふ狀態であるが故である。老人の方では、もうあらゆる説教も聞き、御安心の點も口癖のやうに慣れて聽て居るので、よい加減な態度である、併し老人達のよい加減は決して取るべきではない。

又若い人は今まで世間物質上の事に、たづさはることが多かつたので、偶々精神上の話を聞き、光風霽月といふ感に打たれ、一回か二回で、もう偉い人になつたとか、宗教の信仰を得たとか自分で決めて仕舞ふものがある。併し之は一時のことで永久續かない。熱がさめたあとは全く忘れて仕舞ふのである。之即ち徹底した信念に到達したものでない。即ち現代の老人、青年の求道の態度は尙大に反省を要する點が蓋し寡くないことであると思ふ。

▲曖昧なる自分決めの安心

地方でよく聞くことである。從來法を求める人は大かた宗教の上のことは分つて居る。佛の御助けと云ふことに先づ大體安心して居る。九分通りは安心して居るといふのが多い。併し實際を調べて見ると、殘り一分の所がどうも怪しい、病氣や不幸に陷つた時に、愈決着の法義を聞くといふ積りで居るらしい。重病危篤の斷末に菩提寺の院主が見えて說法し、之れて後生に安心すると云ふ如きである。所が斯く工合よき臨終は何人も望むことは出來ない。經文にもある通り、「人は火死するあり、水死するあり、又寢死するあり」。火の中で燒死ぬこともあらう、水に溺れて死ぬこともあらうし同じく疊の上で死ぬにしても、寢た儘息を引取るものさへある。殊に近頃は腦溢血とか腦充血とかいふ、不意に腦に異常を來し寢たまゝ死ぬものが隨分寡くない。死に際に聽かうといふのは斯の如くにして、當てにはならないのである。故に自分決めの九分通りの安心はよく考へて見ると眞の安心ではない、却て一分の疑の方が眞實であるといふことに深く注意せねばならない。

見易き例を示せば是に一幅の書がある。何某といふ名家の書といふが、なる程種々な點から推考して多分其の名家の筆蹟だと思ふ、然るにだゝ一つ腑に落ちない所がある。事によつたら此の一點て僞筆ではないかと疑はれる。此の品物を快く眞筆の値段て買ひ取る人があらうか。恐らく僅かながら一つの疑問がある爲に、僞物と見做すてあらう。今自分一人ぎめの安心も九分通り

によいとした處が殘り一分の疑の方が眞實となつたなら、到底臨終の說法を當てにすることは出來ないではないか。眞實に道を求むる者は一分一厘の不安をも許すことは出來ぬのである。

▲親鸞聖人の求道

我眞宗の開祖親鸞聖人の法に入られるまでの態度を眺めて見ると、お互に覺る所がなくてはならない。親鸞聖人は、彌陀如來の化身法然上人は勢至菩薩の化身、佛と佛との御對話であるから格別であると、之が普通の信者が聖人を見る態度である。併しながら聖人を單に佛投ひにしないで、お互の上に引比べて見ると、生やさしい事で法を求められたのではなかつたのである。聖人九歲にして叡山に入り、二十九歲、山を出て、法然上人の門に下つたまで

是に二十年間の苦心はどれ程であつたか。十九歲の時、磯長なる聖德太子の御廟に三日間參籠せられたが、其時の靈告によれば汝の生命はもう十年である。命終らば淨土に來よとの御告げ、既に生命は十年と決つたけれども、心の中には安心が出來て居らぬ。幼少の時から天台も華嚴も學び、舍那圓頓の菓を拾ひ、三密止觀の水を汲むといふ程、御勉强なされたけれども、それでも未だ眞實の安心は得られなかつた。苦悶に閉されつゝ早くも十年の年月は流れ去つたのである。悶々やる瀨なき思ひを齎して是に六角堂の觀音へ百夜の御祈願となり、御告げに從て黑谷の法然上人を訪ひ奉ることとなつた。二十年間も住みなれた叡山、殊には朝夕自分を師と敬ひ、敎を受くるお弟子達と離別することは如何に悲し

く思召されたてあらう。聖人は意を決して離山の御文を認めさせられた。

如今兵部を以て捧愚書候。予此年月台星の峯に在て舍那圓頓の菓を拾ひ、三密止觀の水を汲むとも、頑魯にて未だ迷惑出離の曉を知らず、生死の顚倒を常に恐れ福林國淸及修禪の寶殿に丹誠を抽で、神冥慮を仰ぎ終に山王權現の神託をうけ、今夜この觀音の寶前に通夜せしめて、重ねて菩薩の告命を蒙り直に日頃の積願を滿足せしむ。仍て今日寶憧の場を謙下し、遁世の樞に隱れ畢ぬ。今生の拜謁是を限りに候以上。

建仁元年二月十日

寶憧院內學徒中　僧都範宴

一「今生の拜謁是を限りに侯」と訣別せられた所に非常に强き意味がある。比叡山と吉水では左程遠い所ではないけれども、聖人は愈法然上人に遇ふのでなければ年來の疑團が解き得ぬと云ふので大決心をなされたのである。滿二十年間の容易ならぬ準備があつたので、法然上人に御目にかゝらるゝや否や、疑團全く氷解して歡喜に滿たれたのである。乃ち御傳鈔にある如く

眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、敎の理致をきはめて、これをのべ給ふに、たちどころに、他力攝生の旨趣を受得し、飽まて凡夫直入の眞心を決定しまし〳〵けり。

といふ、大安心を得給ふたのである。

▲法然上人の求道

法然上人は何うであるかと云へば、上人の求道も容易ならぬ事で、十三歳叡山持光房源光の門に入り、後黒谷の慈眼房叡空に學び、天台を初め眞言戒律を兼ね修め、更に法相、三輪、華嚴の諸宗を極められた。されど修行切りに多くして、出離の要道にあらず、末世の凡夫、戒律を保つ能はず、正智を起す能はざる愚人の解脱する法はなきかと身心痛く安からず、報恩藏に入りて大藏經を披き、まきかへしまきかへし讀誦して居る間に不圖、善道大師觀經疏の散善義の中に

『一心專念彌陀名號、行往座臥、不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願故。』

の文を得、忽然として久しき間の胸中の雲霧が晴れ彼の彌陀佛の力によりて、吾等凡夫が此儘助けて頂くことのありがさよといふ大安心が得られた。之が上人四十三歳の時であられた。

此に依て兩聖人の間には、單に佛菩薩の化身としてでなく、頭髮の燃ゆるが如き思ひを以て、法を求められた苦心の跡が歴々として認められたのである。此れだけの苦心、これだけの熱烈な要求があつたので、そこに大なる安心、安堵を與へらるゝに至つたのである。

▲美術家の苦心

私の友人に一人の畫家がある。浮世畫美人畫を畫く方であるが、女の後姿を畫くのに苦心したが、どうしても自分の思ふ通りの者がない。帳面を持て新橋の停車場に行つた處、多くの女の中に

一人自分が期待したやうな後姿をして居るものがあつた。是てあるといふて寫し取つて歸宅し、畫板へ向つて腕を振つて畫き上げたのであつた。此事を私に話して更に云ふには、「平生書いて居る時は、よい加減で大抵片付けるけれども、いざ展覽會へでも出すといふ段になるとなか〳〵一筆も忽緒にすることは出來ない。而して思ふ通りのものが見當らぬ時の苦心は實に云ひやうがない」と語つた。實に味ふべき話である。心中に期待するもの久しき間は苦んで居つたが、その熱心が通りて一旦機會を囚ふる時は忽然として妙境に達することが出來るのは決して易しことてはないのてある。

求道は昔の語なら聞法てある。聞く所の態度は何うかと云へば、今日の人は眞實に聞くのては無い、佛敎に聞不足といふことがある。如來の十二部經を聞くに論議の爲の故に、勝他の爲の故に、利養の爲の故に、聞くのは何れも聞不足てあると說かれて居る。論議の爲てなくば勝他、勝他てなくば利養、何れにしても眞の求道の態度とは云へぬ。眞實の聞方は「聞と云ふは佛願の生起本末を聞いて更に疑心あることなし」といふのてある。深く考へて見れば「彌陀の五劫思惟の本願と云ふも親鸞一人の爲なり」といふことが實に尊き御言葉てある。

▲佛敎と基督敎との差別

夫れて佛法の話を聞くにしても、うかとして居ると基督敎とかはりが無いやうに思はれる。神はありがたい、神は吾々を救ふて

下される。而して天國に導き玉ふのであるといふ。眞宗では佛は尊い、吾等衆生をお助け下されて淨土に向け玉ふといふ。二者酷似して居る。そこでよく世間では基督敎の神も、眞宗の阿彌陀樣も同體異名にすぎぬといふ。之は兩敎成立の根本を知らぬからである。基督敎では神が此の世界を作り、世界に生じた人間が罪惡をなす。そこで此の人間を憐みて天國に救ひ上げるといふ。神が先きで人間は後である。然るに佛敎では、衆生が先きで、迷ひに迷ふ衆生を見るに忍びず、五劫思惟の御修行の結果佛となつて凡夫を助け玉ふのである。基督敎で云へばお互人間は神がもと造つたのであるから、人間の惡いのは半分は神樣にも責任がある。放蕩息子が出來たのは、息子自身も惡いには相違ないが、兩親の育て方が宜しくなかつたといふのて三分は親の責任である。之と同じく基督敎の神は人間の墮落に對して當然責任がある、而も全く懺悔しなければ許されぬ。佛敎では三界にめぐり、六道に輪廻して居る常沒流轉の凡夫を不憫やなといふ所から、功德善根も戒律も要らぬ、其儘に救ふてやるぞと仰せられるのである。二者の間には自から差別が存して居る。

▲長者の一人息子

此事は兩方の長者寓子の譚によく顯はれて居る。佛敎のは法華經の中にあるが、或る富豪が一人の子供を持て居つたが、此の子供が少さい時に家出して、それなり歸つて來ない。親の長者はいくら搜しても子供の行衞が分らない。かくて五十年の月日を經

て、親は只々息子の歸つて來るのを念じて居るばかりであつたが、一日偶然に戸外に一人の乞食が居る。よく見れば幼少の時に出た儘の息子、そこで家の者に命じて入れよといつたが、どんな目にあふかと恐れて來ないで逃げ行た。乃て召使をやつてこの家の主人は慈悲深い人である。お前はすきな仕事、庭掃除でも畑の手傳でも、何でも少し手傳つて呉れゝばよからうと云ふて、連れ歸つた。一二年と居る間に段々と主人や家の人の氣心も分かり、乞食もよく働いたので、手代から番頭格に上げたが、もうよい頃と思ふて一日長者は親戚を招き扨て自分はたつた一人の子供が幼年の頃家出して其儘行衛不明であつた。此の度偶然見つけたので之に一切の身代を讓るから宜しく願ふと云ふて、前の乞食、今の番頭を一同に紹介した。是に於て乞食もあゝ自分はこゝの富豪の一人息子で在つたかと初めて氣がついて、親の慈悲の今更に廣大なる感謝したといふのである。之れ即ち衆生が佛の手から逃げまわつたが、佛の善巧方便で終に助けて頂くといふことを此の譚に寓意したのである。

▲懺悔して後家に歸る

基督教の方のは、同じく一人の長者があつて、其一人息子が家出をし、他郷の天地に彷徨ふて、種々様々な艱難辛苦をなめつくした。さて自分の故郷の金滿家なことを自分は前から知つて居るので、歸らうとしたが、親が容易にきかぬので、人を頼み、今迄の惡事罪業を悉く懺悔して、漸く歸家することが出來たと云ふのである。懺

悔しなければ入れぬといふ親――之が即ち基督教の神である。懺悔もいらぬ。告白も要せぬ。罪業のまゝ、泥のついたなりてよいと云ふのが佛教の佛である。此點が基督教徒が煩悶をする所てあり、且佛教徒が横着になり易い所である。懺悔告白をしたから、それて自分の心が再び罪業を冐さぬか、惡事を少しもなさないかといふに、吾々人間はさうは出來ない。懺悔する下から又もや忘念忘想が絶えず起り來るのてある。佛教では懺悔も告白も入らぬ、其儘のお助けといふから、あまり易すぎて却て眞面目な考になれぬ弱點がある。此の話を自分が國の方てした處が、聽講者の中に基督教の人が居つて「佛樣はあまり有難すぎるやつぱり自分は基督教の神がありがたい」と云はれた。之は實に信仰上に於て大切な問題てある。

▲獨歩の遺言やかなし

國木田獨歩と云へば明治文藝界の末期に於て第一流と云はれた程の小説の大家てある。久しく肺を病んて鎌倉に療養して居つたが平生基督教信者てあつて、信仰の事は、牧師植村正久氏が常に往復して説かれたのてある。獨歩が病愈々重いといふ場合、病床に呻吟して不安の念に襲はれ、どうしても安心が得られない、どうか安心を得たいものてある、と植村氏に尋ねると、懺悔なさい、祈りなさい、すれば神に救はれ、而して安心が得られると云はれた。併し獨歩は祈り得なかつた。

植村正久氏は始めて余の心を開ける人也。余の心の合鍵は

渠の手にあり。故に余はその鍵を以て、今の余の煩悶より救はれんとせり。生死の境に迷へる余の心は、氏の導きによりて、初めて救はるべしと信じたり。氏は唯祈れと云ふ。祈れば一切の事解決すべしと云ふ。極めて容易なることなり。然れども余は祈ること能はず。衷心に湧かざる祈禱は主も容れ給はざらん。祈りの文句は極めて簡易なれど祈り心は難し、得難し。

誰か來りてこの祈り得ぬ心を救はずや。余は衷心より祈りを捧ぐるを得ば、その時直ちに救はれ得べきを信ず。

侍床者曰く　五月十三日午後三時　獨歩子病床に泣く。

と絶叫して終に瞑目したのである。懺悔せねば許さぬ祈りをせねば入れぬといふことは、弱き人の子には堪え難き重荷であり、之が又煩悶の種子である。血の出るやうな念佛は吾々の口からは出ない。清淨な念佛が出なければ佛に救はれぬぞと云はれた時には、お互は全く落第である。佛様は幸にもさう仰せられぬ。今獨歩氏は死に臨んで「誰か來りてこの祈り得ぬ心を救はずや」と叫んだ、此の問題が解決されず、不安心のまゝ此世を去つたのである。もし氏に佛敎の緣があつたならば、直に佛の信仰に歸したに相違ない。こゝまで往かぬと嚴密に信仰の問題は分らぬのである。

▲救世軍より眞宗へ

神戸に救世軍の大尉を勤めて居つた上西といふ婦人があつた。なか〳〵信仰の厚い又熱烈な人で、此の人の手で、基督敎の信仰に投じた人が二百人もあつたである。良人は佛敎の信者であつ

たから、たまには説教や寺詣りして聽聞して見られたが、どうしても佛教の妙味が分らなかつた。たま〳〵木部の錦織寺に宗祖六百五十回の御遠忌が勤まるので、近所の人々と共に同伴して木部へ參詣することになつた。丁度此の頃上西女史は、懺悔又は祈禱も中心から出るとしても、此念が長く續かぬ。説教とか、祈禱時間とか、特殊の場合の外はどうも清淨な敬虔の念が相續させようとしてもてきない。若存若亡てあるから、ひどく神の御叱りをうけはせぬかと不安の念が強く起つて來たのであつた。扨て錦織寺へ參詣して見ると、各地から多くの人々が群集して參拜するが、何人を見ても中心歡喜の念に充ちて居る。そこで一人の老婆に尋ねて云ふには

「貴女方は心の中に不安なことはありませんか。」

と問ふと、

「私の心はとてもあてにならぬから、佛樣に縋るばかりです。」と答へる。次に

「どんな風に安心して喜びますか。」

と尋ねると

「私共の心の汚れは佛樣が見ぬいて下さるから、唯此上は何事も佛樣に打まかせて、其の御慈悲の深いのを歡ぶより外はありませぬ。」

と答へた。斯くて眞宗信者の安心はいたく上西女史を感動させ、之が主因となつて度々の説法を聽聞し、家に歸つてから、救世軍を

辭退して、今まで基督教を弘めたその口を以て、今は彌陀の功德を讃歎せねばならぬと決心し、神戸に寄宿舍を建てゝ女學生を預り、女子に眞宗の信仰を植えつけることを畢生の任務として努力せられて居る。誠に有難い話である。

要するに求道の態度は須らく眞面目でなければならぬ。熱烈でなければならぬ。敬虔でなければならぬ。唯ぼんやりとした心持であつたなら何年聞いても無益であり、徹底した信仰は到底得られず、一分の疑惑と不安とを持つたまゝ此世を去らねばならぬ。故に青年と云はず老人と云はず。遠くは法然上人、親鸞上人の求道の態度を偲び奉つて、深く反省する所がなくてはならぬと思ふ。

信仰の絶對性

▲信仰は如何にせば得るゝか

信仰は如何にせば得らるゝか、之は誠に六ヶ敷問題である。否理窟の上からは如何にも説明がつけられやうが、實際問題としてはなか〳〵容易でない。殊に人は個性が異なつてゐるから、其信仰の徑路も一樣に律することは出來ないかも知れぬが、私は私が眼に映ずる親鸞聖人の態度により、て吾々の入信の徑路を辿つて見たいと思ふ。

『嘆異鈔』は親鸞聖人の信仰が赤裸々に現はれておりますが、私は之を拜讀する度に感ずるのは、聖人の御言葉使ひが、何事にても

文法上の所謂最上級の言葉を以つて云ひ表はされてゐる事である。換言せば一章々々に表はれたる御言葉が、皆きりつめた、際どい餘地もない書きぶりである。

▲きりつめた書き振り

先づ第一章に就て申しても。

本願を信ぜんには他の善も要にあらず念佛にまさるべき善なき故に、惡をも恐るべからず彌陀の本願をさまたぐる程の惡なきがゆへに

如何にも思ひきつた云ひ方である。第四章の慈悲に聖道淨土のかはりめありと云ふ章にても。

今世にいかにいとおし不便と思へども存知の如くたすけがたければ、この慈悲（聖道の慈悲）始終なし、しかれば念佛まうすのみぞすゑとうりたる大慈悲心にてさふらふべき

と云ふが如き、或は第三章に「善人なるもつて往生をとぐ、いはんや惡人をや」と云ひ、或は第五章に「親鸞は父母孝養の爲めとて一遍にても念佛まうしたることいまださふらはず」と云ふが如きあまりとしても極端である。更に第十三章の善惡の宿業を論じられた章にても。

よきこゝろのおこるも善業のもよふすゆへなり、惡事のおもはせらるゝも、惡業のはからふゆへなり故聖人のおほせには兎毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。

とある如き、かくまで云はなくてもよいではないか、あまりに吾々の自由意志を無視されてゐるやうな感がする。

▲絶對の自力か絶對の他力か

併し之れが聖人の聖人たる處である。聖人の立場はどこ〳〵までも絶對的である。聖人は中途半途の半腰的態度がお嫌いであつた。自力修養がやれるならやるがよい。どこ〳〵までもやりとはすがよい。やれなければ始めから絶對にやめるがよい。やりかけて見て中途で挫折するとは大嫌である。故に聖人の場合には選擇は只だ二つあるのみであつた。絶對の自力か、絶對の他力かこの二つである。而して聖人は前者の到底駄目であることに氣付かれて後者を選ばれたのである。乃ち吾々の知識も意志も感情も悉く否定して、凡夫が佛になるには絶對他力の本願を信ずるより外は全く道はないことを自覺せられたのである。此自覺があればこそ第二章の

親鸞に於ては、たゞ念佛して彌陀に助けられ參らるべしと、よき人の仰をかうむりて、信ずる外に別の仔細なきなり。

と云ふ、實に思ひきつた信念が得られたのである。

▲大至誠心の披攄

此章を拜讀すると、少しも自己に對する未練がない「地獄落ちはもと〳〵であるから、念佛して誤つて地獄におちても更に後悔しないと云ふに至つては實にきりつめた告白である。これ程眞面目な信念はないと思ふ。網島梁川が『寸光錄』に「どうせ信ずる位

なら身も魂も打込んで信ずるがよい、親鸞聖人が法然上人の一言を信じこんで、縦ひ法然上人に騙されて地獄に墮ちても悔ひぬとまで、一住不退の決定心を起されたのは何等大至誠の披瀝ぞや、一旦信念に立ちつる以上は吾等は其信念の奴隷とならぬばならぬ」と評されたが誠に適評と思ふ。

▲一枚起請文

此點になると法然上人の『一枚起請文』は『嘆異鈔』とくらべて、何となく餘地がある。

念佛を信ぜんにはたとひ一代の法をよく〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじくして智者のふるまひをせずして、唯一向に念佛すべし。

なか〳〵悠々たるものである。自分は學者であるけれども間に合はぬから、學をすてゝ念佛に歸すると云ふ樣な態度である。一見差間ないようであるが實に手ぬるい處がある。親鸞聖人は、心の底から自分はつまらないものぢや、愚痴無知ぢやと自覺して佛のお慈悲を頂かれたのである。學問は間に合はぬから捨てよではない、實は捨つるべき學問もないのぢや、智慧の足腰たゝないものと痛切に感じられたのである。

▲嘆異鈔に對する感想

私は初め『嘆異鈔』を頂くときは、至て有難く感ずることは感じたが、併しさうきりつめて見ないから本統の味ひは出なかつた、否出ない計ではない動もすると反感を起して、こんなに極端に言は

ないてもよいだらうにと思つた點が少くなかつた。殊に十三章の善惡二業の如き、どうも時代の思潮に逢ない。こんな事を青年などに讀ますと、とんだ間違を釀ずかも知れぬと思つた。併し今から考へると全く自分の宗教的經驗が足らなかつた爲めであつた。換言すればそれだけ私の信仰に餘地があつたのである。ところがつく〳〵自己の無能を感じ罪惡を感じ、少しの餘地のないことを感ずる樣になつて、此章を拜讀すると、一々私の胸にピシピシと痛切に感ずる。殊に今まで氣障りになり、極端と思つた樣な處が、却つてなんとも云へぬ味が湧ひて來た。所謂黃金を掘り出す樣な感じとは、此事であらう、眞に有難いことである。

▲自己の未練を離れ

そこで私は一般の人にも「絶對に自己の未練を離るゝことを勸める」。眞に自己の罪惡を感じ、意志薄弱を感じ、自己の無常を感じたなら、決してその儘ぢつとしてはゐられないのである。寸分餘地を見出すことは出來ないのである。こゝまできりつめて自己を觀じたとき、始めてかゝる自分を助けんが爲めに大悲の御佛が、救濟の本願をお立て下さつたのであると、氣付かして頂くのである。その大悲のやる瀨なき大御心が、我に屆いて下されたのが、乃ち他力信心の頂かれたのである。

私は思ふ今の人は法を說くにも餘地があれば、聞く人にも餘地がある。云はゞ相方に氣兼や遠慮がある。之れではいつまで立つても、ほんとの信仰に入る事は到底出來ないのである要するに

信仰は求むる人の眞面目なる態度が望ましい。求むる人が眞劍に自分の自覺が起つて、もう到底望みのないものであると、きりつめたる所まで進むと、そこに絶對他力の門口が開からるゝのである。私は此道を外にして他に入信の道はないと固く信ずるのである。

社會恩に對する道

（大正二年七月稿）

▲悲慘なる犧牲者

心地觀經の内に四恩と云ふことが說いてある。一には父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩此である。此内衆生恩と云ふのは、今日の言葉でいへば社會恩であるが、此社會恩と云ふことに付て、痛切に感じた事柄がある。近頃飛行機の研究が爛になつた。各國が相競ふて之が改良進歩に力を盡してゐる。數年前より我國にも之が研究會なるものが設けられて、段々と進歩の跡見るべきものがある。然るに此飛行機の研究の爲めに、今日迄歐米各國にて悲慘の最後を遂たるものが、既に二百名を越えてゐると云ふ事である。我國に於ても今年三月二十八日に木村德田の兩中尉が、所澤附近に於て墜落して悲慘な最後を遂げた。滿都の市民は非常なる同情を以て兩氏の死を惜しみ、盛なる葬儀を營んで之が英靈を弔ふた。私も之に會葬して無限の感に打たれた。それから間もなく五月四日には民間飛行家の武石浩波氏が、京都大阪の都市聯絡飛行を企て、深草練兵場に於て、二百米

の高處より墜落して、人事不者となり、遂に不歸の客となつた。武石氏の如きは米國のカーチス飛行學校を卒業して、芽出度歸國して今や將に大に我飛行界を賑はさんとして、僅か二日の飛行をなして、果なくなつた。嚮きに木村徳田兩中尉の死に接し、今又武石氏の訃音を聞き感慨無量なるものがあつた。

▲痛切なる二個の教訓

此の悲慘なる出來事に接して、予は二つの力强き教訓を與へられたのである。乃ち一つは社會恩の鴻大なることを痛切に知らして貰つたことと、今一つは如何にせば此社會恩に報ゆることが出來るかと云ふことである。社會恩と云ふことに付ては、豫てより感じないでもないが、父母の恩とか、國王の恩とか、感ずる樣に、痛切に感ずることが出來なかつたのである。否私ばかりではない、一般を見渡して見ると、どうも社會恩と云ふことが、適切に感ぜられてゐない樣である。實を申すと吾々の日常生活に於て、社會恩を蒙むらない日は一日もない。吾々が一寸旅行するにも、必らず電車や汽車に乘る。一寸通信をやるにも、電信電話の便を借りる。或は電燈であれ、瓦斯であれ、其他日常の衣服飲食の末に至るまで、一として社會の恩惠を蒙むらないものはないのである。然るに一般の人々は兎角あるべき筈のものがある樣に考へ、此等の事物に對して感謝の心を以て接する事が極めて稀である。

▲淺薄なる現金主義

彼等のある者は、か樣に考へてゐる人もある。社會恩と云ふ樣

なことは畢竟無意義である。社會は互に有機的關係を以て成り立つてゐるから、互に持ちつ持たれつてある。吾々が社會の恩惠を蒙むる點が假りにあるにしても、吾々も亦社會の爲めに盡してゐるから云はゞ五分〳〵である。特に社會恩と云ふべきものはないのであると。又ある人はこんな考を持つてゐる人もある。

吾々は社會のお蔭を蒙むつてゐることは事實であるが、それには相當の代價を拂つてゐる。例へば電車に乘るにしても汽車に乘るにしても、或は電信電話を使用するにしても、それ相當の代價を拂つて使用するものであつて、敢て恩を盜むものではない、否寧ろ吾々がそれを使用するので、社會は成り立つて行くのである。斯の如き議論は自己本位の淺薄なる現代主義の立場から云へば、成立つかも知れぬが、吾々はあまりに自分勝手な說であると思ふ。

なる程吾々が社會に生活して、日々汲々として働いてゐることが、間接には幾分か社會を補益しつゝあるとしても、併しそれが、かの洪大なる社會恩を打ち消すには、あまりに薄弱である。又吾々が電車や汽車に乘るには、相當の賃金を拂つてゐる。品物を買ふにも、それ相當の代價を拂つてゐるに相違ない。併しそれによつて差引勘定「ゼロ」である、恩も借りもないものであると云ふ考はあまりに現金主義の考へと云はねばならぬ。

▲文明の利器は犧牲者の賜なり

今日の文明の利器は、その始めを考へて見ると、一と通りの苦心で出來たものではない。汽車にしても、汽船にしても、電信にして

も電話にしても、其他日常の品物萬端に至るまで、なか〳〵容易ならぬ苦心によつて出來上つたものである。幾多の生命と財産とが注がれて出來上つたものが、少なくないと思ふ。今日の文明は古今東西の志士仁人が、血と肉とを犧牲にされた、高價な遺物であると云ふことが云へる。近頃飛行機の研究を見て一層此の感を起さゞるを得ない。かの飛行機はまだ初期の時代である、試驗の時代である。これが果して實用的に成效するか否かは疑問である。併し之れ迄に文明の利器が發明せられた當時は、此疑を以て迎へられたに係はらず、數年若しくは十數年の後に於て、必らず成效の美效を收めてゐる。汽車が發明せられんとするとき、一時間十哩を走らすと云ふ計畫に對して、社會は驚愕と嘲笑との眼を以て眺めた。然るに數年を出でない內に二十哩も三十哩も走る汽車が出來た。マルコニーが無線電信を發明したときは、五哩か十哩かの近距離に於てのみ成效したが、日露戰役の時は已に二百哩以上を通信することが出來るようになつた。近年に至つては、布哇島と銚子濱との無線電信が交換さるゝに至らんとしてゐる。こういう調子で進んだならば、飛行機が實用的に一般の社會に利用せられ、或は軍事上、戰術の基礎に大變動を來す樣な時が、必らず來るに違ないと思ふ。唯問題は時間の問題である。それにしても今後更に幾千の犧牲を拂はねばならぬかは頗る注目すべき點である。今日迄已に二百名を越へてゐる點から察すると、是れが完成までには更に數十倍の犧牲者を出すことを甘んじなくては

ならぬと思ふ。是に至つて吾々は社會恩の洪大なることを痛切に感せざるを得ないのである。一つの文明の利器が實用的に完成せらるる迄には、實に多大なる犧牲か拂はれてあることを思へば、吾々日常生活の一々が、社會恩の包圍を蒙むらないものはないと云ふことが出來る。

かくの如く考へて來ると、吾々が社會から受けつゝある恩惠は實に多大なるものがあると謂はざるを得ない。釋尊が四大恩の一に衆生恩とて社會の恩惠を加へられたのは、誠に意味あることゝ思ふ。

▲如何にして社會に酬ゆべきか

此の如き洪大なる社會恩に對して、如何にせば之を報ゆることが出來るか。之に付て私は二樣の道があると思ふ。一には物質的に社會の發展を謀ることとて、今一つは精神的に社會の發展を計ることとである。

物質的に社會の發展を計るには、或は社會的事業をなし、或は殖産興業の道を開きて、社會の發展に貢獻するにあるのである。精神的に社會の發展を計るには社會の道德を發達せしめ、良風美俗を作りて、精神的に社會を向上せしむるのである。

近來社會事業の年と共に勃興するは、社會の爲めに誠に喜ばしき現象である。乃ち孤兒貧兒、鰥寡孤獨の救濟を始めとし、慈善病院、免囚保護、盲唖教育、感化院等、熾に勃興して、生存競爭の落伍者を救助するの道が益々完備するに至つた。其他殖産興業の道も年

と共に着々其歩武を進むるものがある。然るに獨り精神的方面に於ては、頗る憂ふべき現象二三にして止まらざるものがある。吾々社會恩を報ぜんとするものは此の點に大に着眼しなければならぬ。現代の社會は思想の最も混沌たる時である。否思想界の危期に迫つてゐると見ることも出來る。所謂現代主義は極めて淺薄な皮相的の立場を離ることは出來ない。近頃矢釜敷問題となつてゐる「新らしき女」の如きも、畢竟現代思想の缺陷を暴露したものと見ることも出來る。吾人は眞正の意味に於ける、婦人の自覺を歡迎するものであるが、某社一派の主張や言動に至つては、斷じて首肯することは出來ない。

▲他人の問題に非ず自己の問題なり

かゝる時代に於て、吾人の責任の決して輕からざるものあるを自覺せざるを得ない。如何にせば此社會を健全にすることが出來るか。如何にせばかの迷へるものを救ふことが出來るか。吾人は彼等に正しき信念を與ふることより外に救濟の道はないと思ふ。佛の玉はく、恩を知るものは、常に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。恩を報ずる者も、亦常に一切衆生を敎えて、阿藐多羅三藐三菩提心を發さしむべし。」と、實に吾等が社會恩を報ずるには先づ自ら確乎不拔の大信念に浴して、而して後社會一般をして亦信念に浴せしむる樣務めなければならぬ。然らば問題は結局人の問題にあらずして、自己の問題である。自己の正しき發展、自己の精神的向上を謀ることが、自己に取りて焦眉の急務であるのみ

ならず。それが直に社會恩を報ゆることになるのである。

畏敬すべき校僕

（明治四十四年月稿）

▲感心なる老爺

予が監理してゐる千代田等學女學校の校僕に伊藤孫十郎と云ふ感心な老爺がゐる。四十二年の十一月頃始めて、我校に雇はれて以來今日に至るまで、約十四五ヶ月の間、謹直に忠實に骨身を惜まず働いてゐる。此間に於ける彼が眞俗二諦の生活狀態を一々記述したならば、明治に於ける妙好人傳の數頁を飾るに足るものがあると思ふ。予は彼が言行を以て常に我校子女の訓育上の資料に供しつゝあるのである。

▲校僕となりし因緣

彼は越前の生れであるが、數年前一家擧つて北海道に移住し農を以て生計を營んで居つた。彼は最早六十の老體で、彼地の恒寒氷雪には、さすがに元氣なる老爺も、年一年と弱り行く心地せられて、空しく爐邊に親しむ身となりて、徒らに壯者の厄介にならんよりは、暖國に出でゝ、ふさはしき職を求めて、餘命を送らんと思ひ、直ちに、かねて國元にて親しくせし檀那寺の知るべなる築地の某寺を辿りて、遙る〳〵東京に上つたのである。丁度彼が上京した翌日のことである。予が校に從來雇ひ入れてあつた校僕が暇を取つたので、其候補者を撰擇してゐると、築地本願寺からしか〳〵の老爺があるとの電話であつた。すると其夕方になつて頑丈な老

爺がやつて來た。越前訛その儘の朴訥なる老爺は、早速に學校の樣子を聞いて、是非ともおいてくれと懇請した。彼は、我が女學校が普通の學校と趣を異にして、本派本願寺の關係せる學校であり、御裏方を校長に頂いてゐると聞かせられたとき、彼れの眉宇は歡喜と決心との色を以て充されたのである。かねて東京は大都會の割には無佛法の土地柄であると、人の噂さに聞きゐたる彼は、せめては毎月の御命日なりとも、聞法の席に列なることの叶ふ樣な家に奉公したいものであると心に願ひつゝあつたが、意外にもかかる學校に引き合はされ、朝夕お佛壇のお給仕まですることの出來る處に使つて貰ふとは何たる仕合なことであらうと、全身の喜びを捧げて自己の仕合せを感謝したのである。

▲忠勤なる働き振り

雇ひ入れられた彼は、其の日より、實に忠實に又勤勉に働いた。彼れは校の内外の掃除と、臨時の使ひに赴くことゝが與へられた仕事であつたが、北海道で櫛風沐雨の荒仕事をしてゐた彼には、あまりに現今の境遇が平穏で、あまりに樂過ぎるのであつた。併し彼は他の多くの雇人にありがちの怠惰を貪るとか、安逸に耽るとか云ふ樣な考は少しも抱かなかつた。彼は怠惰とか安逸とか云ふことが、果して如何なるものであるか、それすら知らないようである。そこで彼は絶えず無聊を訴へて用事を求むるのである。學校では寧ろ彼に命ずべき仕事の不足なのに困つた位である。

▲驚くべき廢物の利用

彼は段々と學校の樣子が分つて來ると、自分で自ら仕事を見出し、孜々として働くのである。彼れは規定の仕事を終へ、なすべき用事が見付からない時は、ボール箱より絲屑と布片とを取り出して雜巾さしを始める。抑もゝ絲屑と云ひ布片と云ひ乃至之を縫ふ針と云ふのは、皆之れ彼が掃除の折裁縫室や廊下で拾ひあつめた日々の廢物の利用である。彼は生徒が捨た古ハンケチや、穢れた布片等を一々分類して、幅の狹いものは集めてはたきを作り、幅の廣いものは之を一々洗濯して雜巾に用ゐるのである。かくて寸暇を利用して作り上げた雜巾は、其數積んで數百枚の多きに達した。我校で日々教室や廊下の掃除に利用する雜巾は、皆悉く老爺の賜である。時には寄宿舍用のものまで彼の供給を受くるのである。而して彼は之によりて一文の勞銀をも貪らないことは勿論のことである。更に驚くべきは彼が一昨年以來日々拾ひ集めた綿屑が、此頃に至つて漸く積んで一貫目以上に達したので、之をもつて彼は一枚の蒲團を作るに至つた。塵も積れば山を成すの諺、實に吾人を欺かないのである。

▲彼が副業

學校は彼の仕事の餘暇を以つて、晝食を持たない人にパンを賣ることを許してゐる。彼は自らジャムの製造法を學んで、ジャムとゝもにパンを賣るのである。一日の純益が拾錢位はあるので、之を一ヶ月に見積れば三圓内外の純益を得る都合である。處が之に付て特筆せざるを得ない出來事があつた。彼がパンを賣り

出してから半歳を經過した頃であつた。一日予は、彼に向つてパンの賣上高と純益とを取調べたことがある。處が彼が當然收め得べき純益よりも實際の利益額は遙かに少なかつたのである。凡そ月三圓位利すべき筈のものが、實際は二圓位しか利益になつてゐない。そこで予は其理由を尋ぬると、全く俗に云ふ掛け捨てであつた。生徒の中の不心得の者が、お金を拂はないで掛け捨てをやつたのである。そこで予は「何故帳簿に名前を控へて催促をしないのだ」と尋ねると、彼曰く「名前を控へておくと、それを見る度びに思ひ出します。控へてさへ置かなければ、どなたがどうであつたか全く忘れてしまひますから、其次きにお目にかゝつても、いやな顔をしないで賣ることが出來ます。……いやもう掛け捨てと云ふことは、どの商賣にもあります」。と云て少しも氣にかけない樣子であつた。予は痛く老爺の精神に感心したが我が生徒にかゝる不都合なものがあるとは、如何にも情けないと思つたから、早速倫理の時間に此話をすると、生徒も各自非を悟つたと見え、爾來掛け捨ての惡弊を絶つことが出來た。昔時大和の清九郎が人の云ふまゝに薪を賣つたと云ふ『妙好人傳』の逸話も思ひ出されて、老爺の行のいやましに尊く感せらるゝ。

▲非常なる節儉家

彼は非常なる節儉家である。學校から與へる給料は元より少額ではあるが、大部分は之を貯蓄するので、相應の資金を蓄へてゐる。彼は衣服に於て全く無頓着であることは勿論であるが、食物

の方に於ても尋常人の想像以上である。彼はお米の外には殆んど副食物を要しない。元來農家の出て、非常な麁食に養れた彼の腸胃は、如何なる麁食にも、如何なる缺乏にも堪へ得る丈に鍛はれてゐるのである。それ故彼は朝夕お米とお味噌さいあれば、何物を要しないのである。毎週二度の割烹實習の際には、大根の片切や、菜葉の殘りが澤山出るが、彼は之を貰ひ受けて醬油も入れないで唯鹽のみて煮て食する。彼が副食物が一ヶ月二十錢を越へないのを見ても、如何に麁食に安んじてゐるかゞ分る。併し只之れ丈聞いてゐると如何にも彼は節儉の度を越えてゐる樣な感がする。否現に學校でも始め教員室でそんな非難を聞た事もある。然しよく〳〵彼が全班を通じて觀察すると、此の非難は正鵠を得たものとはいへぬ。そは云ふまでもなく彼れは金を集むると共に散ずることをよく心得てゐる人であるからである。

▲一廉の慈善家

彼は一廉の慈善家である。彼若し火災とか水害とか、其他慈善的事業のあるを聞けば必らず。相當の寄附を惜しまない青森の火災でも昨夏の水害でも、彼は五十錢なり一圓なりの寄附を必らずしてゐる。一ヶ月二十錢の副食物に安んじて節儉する人が、五十錢一圓のお金を惜しげなく寄附することは、一大矛盾の樣である。節儉の眞意を解せざる人には、這般の消息は不可解であらう。予は彼が不時の收入を得る度に、築地本願寺や盲人學校に寄附しつゝある事を目擊してゐる。昨夏國元の說教場にお佛壇の購は

るゝを聞き、一ヶ月の俸給を擧げて寄附を申し込みたるが如き又大に特筆すべきである。彼は又按摩に巧みである。予が勉強に倦んだる頃は常に來つて肩をもんでくれる。或は他の教員でも、生徒でも健康の勝れざることあらば、脈を取り腹をさすつて少しも厭はない。又平素數種の藥を用意し、病人あらば續々之を施す。而して更に價を請はない。たまゝ代金を拂はんとするものあるも彼れ決して受けない。強て與んとすれば彼れ辭して曰く「お金を頂く位なら始めから、お上げ申しませんと」予の如きは十錢二十錢の高價なる藥を、彼より、貰ひ受けたること數回以上である。恩惠を蒙むることが淺くないのである。彼が施藥の爲めに費す金額丈でも、毎年四五圓には上るそうである。

▲皆是れ信心の餘德

此の如く忠實に働き。此の如く慈善に勵み、生徒からも教員からも「老爺さん〳〵」と祖父の如く慕はるゝ彼は抑も如何なる人であらうか。彼は越前の片田舍の老爺である。教育と云へば僅に假名をひろうて『御文章』を拜讀するに過ぎない。かゝる無學な文盲同樣な一老爺の言行動作がかくまでに感ずべきことの多くあるは何の力であるか。云ふまでもなく信仰の力である。彼は無我に絶待他力のお助を喜ぶものである。彼が口常にお念佛を絶たない　殆んど念佛三昧と云つてもよい。彼が唯一の樂はお說教を聽聞することである。土曜、日曜には近所の說教場に缺かさず參詣してゐる。平時でも全く暇の時は小使室に端座してお聖

教を拜讀してゐるのである。彼が信仰は實に純潔である。よくお聖教の意味を咀嚼してゐる。而して少しも自力的の執心を雜へない。此種の同行によくあり勝ちの理窟同行の弊が少しもない。御開山樣や蓮如樣が、御同朋御同行とかしづきたまうたのは、かゝる同行であつたであらうと察せらるゝ。予は日々彼のお念佛の聲を聞かされては、蓮師が「尼女房の尊うとやありがたやと喜ぶを聞いては人が信を取るぞ」と仰せられた語のしみ〴〵と深く感せらるゝのである。

（附記）彼は在校一年有半の後止むを得ざる事情で北海道に歸つたが最近再び上京して今は澁谷在の新町に奉公してゐる。

大正四年四月十四日印刷
大正四年四月十日發行

信仰より見たる人生
定價金九拾錢

著者　泉道雄
發行者　椿音助　東京市芝區三田功運町九番地
印刷者　高橋郁　東京市京橋區弓町二十五番地
印刷所　三協印刷株式會社　東京市京橋區弓町二十五番地

複製不許

發行所　東京市芝區三田功運町九番地　至文堂書店　振替口座東京二九五〇七番

東京高等商業學校講師　田中美也司
三越通信販賣係　倉本進　著

商用文講話及文範

定價金七拾五錢
郵稅八錢

商用文は商戰の武器である。商用文の巧拙は直に業務の上に影響し從て一生の損益得失は皆これから割出される。今日の實業界では、適當の文書係の缺乏を嘆じて居る。自ら經營の任にある諸君、又これから身を商界に投ぜんとする諸子は、直に熱心なる研究を開始せらるべきである。本書は多年商用文の講義を擔當せる田中先生と、日本第一の大商店三越呉服店に於て通信の實際事務に從事せる倉本先生と、協力苦心の結果に成れるもの。說明は懇切、行文は平明、一讀して商用文が自由自在に書ける

本書に對する各新聞の批評

東京朝日新聞評

著者は共に商用文教授上に實驗を有する人。其述作は勿論其實地より得たる缺陷を救ふの用意あるべし。商用書翰文の講話を始め各種の書翰文例より電報、商況、廣告及諸書式類に至るまで親切なる摸範を示したり實に商業子弟の好參考書

國民新聞評

著者等多年の教授と實地の經驗に基き、商用書翰文について概用を述べ以下其文例を滿載し其他電報文、商況文、諸書式類等の諸章を說いて解說實際的且つ簡にして要を得て居る

萬朝評

先づ一般書翰文の組立てより說き起して披露、紹介、推薦、通知、依賴、申込、照會、謝絕、註文、請求、承諾、感謝、勸告、抗議、謝罪、辯解、祝賀、見舞、電報、商況文、諸書式類の各種に亘り商業上必要なる文章の書き方と文例とにつきてその秘訣を示せり

コ1175

早稲田大學教授　五十嵐先生著

旅と家

近刊

内容目次

京都、奈良、中國を經由しての阿蘇登山記
木曾に遊ぶ記
「雀と伊藤博文」　「山茶花と東鄕」
「柿」　生まれ變はつたら
其他日記　書翰文等

五十嵐先生が文章界の重鎭たるは世既に定評あり。其輕妙にして周匝なる。洒脫にして謹嚴なる。眞に當代の第一人なりと謂ふべし。或は偉人傑士を描き或は田夫紅女を模し。花鳥風月を寫されしもの。載せて本書にあり。

終